

令和 元 年度

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4091700064		
法人名	有限会社森の母屋		
事業所名	グループホームはなれ		
所在地	福岡県直方市上境2614-3		
自己評価作成日	令和元年11月6日	評価結果確定日	令和元年11月21日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報の公表制度のホームページで閲覧してください。

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/40/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ヘルスアンドライツサポートウリずん
所在地	福岡県直方市知古1丁目6番48号
訪問調査日	令和1年11月14日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

日中は訪問看護ステーションの看護師が様子観察に来所します。また利用者が容体急変時は看護師がすぐに対応でき、連携している医師とも連絡をとり指示を仰ぎ、適切な処置を施す事が出来ます。施設の窓からは、福智山系が一望でき季節の移り変わりを目と肌で感じられます。施設の庭には畑を作っており季節ごとの野菜の収穫を見ることが出来、収穫した野菜は日々の食卓に並びます。特に夏はスイカ割、秋はさつまいもを収穫し、さつまいもを焼きみんなで集まって美味しく食べています。隣に小規模多機能施設が有り、共有広場にて体操やゲームを楽しんでいます。昨年6月に開設したグループホーム母屋が山部にあり、月に1度の行事の時は、一緒に過ごしています。今年から地域の支援学校の生徒・先生が来所され、利用者が生徒との会話を楽しみに行っています。

開所から5年目を迎え、理念の唱和を継続し全職員一丸となって「心声を聴こう」と、日々ケアに取り組んでいる。胃腸の方や幻視があったり歩行などの動きが悪い方もあり、100歳を超えられた方の好きなことをしたい(ベッドで寝ていたい)との意向を重視しながら、「自分らしく自然に生きたい」との理念を、かかりつけ医や敷地内の訪問看護ステーションとの密な連携で具現化している。隣接する小規模事業所開設時から利用されホーム開設と同時に入居された方は、年越し蕎麦を食べ今年元旦に逝去されたが、最後まで自分らしく生きて自然に亡くなったと、職員は達成感を感じている。今年から始まった地域の支援学校との交流や日頃の暮らしぶり、恒例の秋刀魚焼きなどを、7月から発行しているホーム便りで家族や運営推進会議で報告し、運営に関する意見の表出を促している。市のハザードマップに福祉施設として法人名を連ね、今年8月の避難訓練では地元消防団による放水があるなど、地域の理解や協力得ながら、「慣れ親しんだ地域で慣れ親しんだ人達といつまでも笑っていたい」との理念に邁進している。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~57で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
58	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:25,26,27)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	65	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています (参考項目:9,10,21)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
59	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:20,40)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	66	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,22)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
60	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:40)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりの拡がりや深まりがあり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
61	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:38,39)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:51)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	69	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
63	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:32,33)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	70	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
64	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:30)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

自己評価および外部評価結果

ユニット/
事業所名 **グループホームはなれ**

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念は玄関の壁、スタッフルームに掲示している。朝礼時、理念を唱和し、利用者個々の生活環境を尊重し、日々の実践に取り組んでいる。	開所時からの職員もあり、理念の唱和が継続している。職員は「心声を聴こうと思いながら勤務している」と話すなど、全職員一丸となって理念の実践に取り組んでいる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の自治会隣組入会し、隣組の行事、市の行事には積極的に参加している。地域の支援学校の生徒・先生が来所され交流を深めている。	自治会に加入し、管理者が地域防災研修に参加したり、入居者と近隣小学校で開催される自治会主催の行事に参加している。今年から始まった支援学校との交流では、入居者が生徒に生活体験を話すなど、双方に良い刺激になっている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域の区長、民生委員、老人会の会長等に認知症ケア、介護保険に関する情報提供を行い、地域の人たちに向けて活かしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議では、地域の方、利用者の家族に参加してもらい、当事業所の実態を報告し、出席者より意見や要望を出していただいている。運営推進会議の議事録はスタッフルームにて誰でも閲覧できる。	家族や協力施設の施設長などの参加で、定期的開催され、議事録を整備している。支援学校との交流の様子や、匿名の通報で市から受けた指導やホームの対応をつぶさに報告したり、食事用のエプロン使用について参加者から意見を伺っている。	運営推進会議の設置目的に鑑み、今年7月から発行されているホーム便りなどを活用し、全家族に運営推進会議の案内や内容の報告をお願いします。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市とは、報告。連絡。相談等を電話や面談で行っている。	市担当者から相談を受けた方が、系列の小規模利用を経て系列のグループホームに入居している。又、経済的に困窮した利用者について相談し、養護施設に入居されるなど、日頃から法人として情報交換や連携を取っている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	職員全員が身体拘束を理解し、日中は玄関の施錠はせず、職員見守りで自由に屋外へ出ていけるようにしている。	定期的に身体拘束適正化委員会を開催している。身体拘束に関する研修に参加した職員は、グループワークで事例を話し合い、「ちょっと待って」が拘束になることも理解し、対応を共有している。「帰りたい」と荷物をまとめる入居者もあるが、動向を見守りタイムリーな声かけをしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	職員は外部の研修を受けている。、事業所内では職員全員で虐待につながる行為がないか、確認を行い虐待防止に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8	(6)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	管理者は外部研修で成年後見制度・権利擁護については学んでいる。職員には、会議にて研修している。利用者開始時には契約書等にて説明している。現在のところ成年後見制度の利用者はいない。	日常生活自立支援事業や成年後見制度に関するパンフレットなどを整備し、契約時や随時説明している。現在、司法書士を通して後見制度の活用を手続き中の入居者もある。	
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の際には、重要事項説明書について十分説明している。後日疑問に思われたことなどは、いつでも尋ねていただくよう伝えている。		
10	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	契約書の中に苦情に対しての受付を表示している。利用者からの事業所での苦情や、家族からの苦情に対しては迅速に対応し解決を図っている。	家族の来所時や状況に応じて随時、家族に心身の状況の説明や連絡をしている。今年7月から毎月、日頃の暮らしぶりや行事毎の入居者の笑顔満載のホーム便りを発行し、家族の意見の表出を促している。今年も系列の事業所合同でさんま焼きをしているが、今回は家族の参加はなく、来月のクリスマス会は家族に参加を呼びかける予定である。	
11	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	日々のミーティング、定例会議等で職員の意見を聞く場を設けている。	毎月の職員ミーティングでは、ケアの仕方の統一や業務時間の見直しが話し合われている。代表や敷地内の訪問看護事業所の所長が参加し、認知症の対応や医療面での相談に応じている。職員は夜勤時の入居者の「体が痛い」や「足が痛い」等の訴えへの対応を相談している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	給与等に反映される査定や人事考課は実施し、毎新年度の4月分からベースアップにつなげている。介護福祉士等の資格を取得するための、研修勉強会等には優先的に公休、有休を与えている。		
13	(9)	○人権の尊重 法人代表者及び管理者は、職員の募集・採用にあたっては性別や年齢等を理由に採用対象から排除しないようにしている。 また、事業所で働く職員についても、その能力を発揮して生き生きとして勤務し、社会参加や自己実現の権利が十分に保証されるよう配慮している	職員の募集・採用にあたっては、性別や年齢等を理由にして採用はきめていない。	亡くなられた方の家族や職員の紹介などで、男性職員1名を含む40～60歳代の職員が勤務し、職員体制に応じて系列内で異動している。県主催の介護技術向上研修などの参加を奨励し、職員から「行って良かった」との感想が多い。職員の育児や家族介護等、職員が抱える課題に配慮したシフトが生まれ、設置された入浴リフトは職員の介護負担を軽減し、正社員への登用もあるなど、働きやすい職場づくりに努めている。	
14	(10)	○人権教育・啓発活動 法人代表者及び管理者は、入居者に対する人権を尊重するために、職員等に対する人権教育、啓発活動に取り組んでいる	職員等に対する人権教育・啓発活動には研修を通じて取り組んでいる。	内部研修だけでなく、法人職員が県社会福祉協議会主催の人権研修中で、伝達講習を予定している。管理者は入居者を〇〇ちゃんではなく苗字で、同姓の場合下の名前で呼称するように指導するなど、人権を尊重したケアに取り組んでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
15		○職員を育てる取組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	今年度は福岡県主催の介護職員技術向上研修に参加している。研修受講後は職員間で確認し合い、日々の業務の中でトレーニングしている。		
16		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会をつくり、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取組みをしている	同業者とのネットワーク作りや、勉強会は現在行っていない。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
17		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	利用相談を受け、初回来所時には利用者を尊重し、本人の困っていること、不安な事や要望などを、表情や行動を観察しながら、傾聴できる場の雰囲気、関係づくりに努めている。		
18		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族の方が電話や来所された時には、困っている事、不安な事、求めている事をよく傾聴して施設の目的や機能、実施している事などの説明を行い家族の要望等を伺いながら、関係づくりに努めている。		
19		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人、家族の思いや要望を把握して、施設の介護の特性や他施設の特性などの状況提供を行い、必要なサービス提供を支援している。		
20		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人の思いに寄り合いながら、日々の暮らしの中では、天気の良い日には一緒に散歩に出かけ。洗濯ものは一緒にたたみ、ゲーム・体操等は職員と一緒にやり、作品作り塗り絵等出来た時は達成感を皆で共有し互いに支え合う関係を築いている。		
21		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場に置かず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	施設での生活の中で出た不安や要望を家族に伝え、家族に協力して頂くことで共に利用者を支える関係を築いている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22	(11)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	昔から、馴染みのある方(教え子さん)が来所された際は、ゆっくりと会話等が出来る場所の提供を行い、本人との関係が途切れないように支援している。	遠距離在住の家族もあるが、毎週や月1~2回など来訪される家族や、家族と温泉や食事に出かける入居者もいる。教え子の来訪がある100歳を越えられた入居者もあり、馴染みの関係継続を支援している。	
23		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士の相性等を見きわめ、相性の良い利用者同士を近づけ、独りになることを防ぎ利用者同士の関係の強化に努めている。		
24		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	3月に亡くなられた利用者の家族とは今でも交流している。その家族からの職員(看護師)の紹介があり、現在隣の小規模で働いている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
25	(12)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者とのコミュニケーションを図り、本人の思いを傾聴することで、ニーズの把握に努めている。	職員2名で入居者3名を担当し、レクリエーションの後や一緒に洗濯物を畳んだり、おやつを食べながらゆっくりと過ごす時間を設け、入居者の思いや意向の把握に努めている。要介護認定調査項目を活用したアセスメントシートで心身の状況の変化を把握し、全職員で情報を共有している。	
26		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	アセスメント表を見たり、日常生活の中で若いときの話の聞いたりし、利用者の背景の把握に努めている。		
27		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎朝バイタル測定を行い、調子の悪い利用者においては、訪問看護のナースと相談し、できることを見極めるように努めている。		
28	(13)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人の状態維持のために必要なケアを、訪問看護や家族、職員と話し合い、現状に即した介護計画を作成している。	入居者や家族の意向を明記し、短期目標の具体的なケア内容を記載したケアチェック表を活用し、計画の作成や見直しをしている。100歳を超えられた方の好きなことをしたい(ベッドで寝ていたい)との意向を重視しながら、手足のリハビリを組み込んだり、食材を細かく切るなどで食事摂取を支援し、理念の「自分らしく自然に生きたい」の具現化を日々模索している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	介護記録に一日の様子を記入し、朝・夕に申し送りを行うことで、利用者の変化に対応を職員間で共有しながら実践に生かしている。		
30		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	家族が来所され、利用者本人を連れて近くの温泉に行っている。		
31		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	2年前から地域の人が、毎週金曜日に読み聞かせを行っている。地域の演芸団が3年前から来所され歌や踊りを披露している。利用者も参加し1万円札の花輪や紙ふぶきで盛り上げている。		
32	(14)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	2週に1回、利用者本人の症状に合ったかかりつけ医(神経内科または呼吸器系内科)の往診時に、日々の変化を伝えることで、適切な医療を受けられるように支援している。	4名のかかりつけ医の往診や入居者が希望する眼科や歯科の訪問診療を支援している。胃瘻の方や幻視があったり歩行などの動きが悪い方もあり、敷地内の訪問看護ステーションと密に連携し、適切な医療を受けられるように支援している。外部の受診には職員が同行しているが、今後は受診状況を把握してもらうために、家族にも同行を呼びかける予定である。	
33		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	バイタル測定や利用者本人の様子がいつもと違う時には、訪問看護のナースに報告し、対応して頂く。(訪問看護ステーションは同一敷地内で誰かが常駐)		
34		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。又は、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	病院の先生やソーシャルワーカーとの連携を密にとり、入退院の打ち合わせや状態の把握に努めている。早期に退院しても病院の先生の特別指示書等により訪問看護が対応している。		
35	(15)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	「重度化した場合・看取りに関する指針」を作成する。利用者家族、介護職員、管理者、かかりつけ医、訪問看護の連携にて取り組む。	隣接する小規模事業所開設から利用されホーム開設と同時に入居されていた方が、年越し蕎麦を食べ元旦に逝去されたが、最後まで自分らしく生きて自然に亡くなったと、職員は達成感を感じている。又、緊急入院後隣接の小規模事業所を利用し、3月自宅での看取りを支援した方もあり、かかりつけ医や敷地内の訪問看護ステーションとの良好な連携の成果となっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急事態発生時のマニュアルはあるが、実施訓練を定期的には行っていない。しかし、実践にてその都度訪問看護と適切に対応している。		
37	(16)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	地域(上境)の消防団とは協力体制を築いている。今年は8月4日に小規模多機能と合同で避難訓練を行っている。また今年は地域の防災訓練があり、管理者は参加する。	地元の消防団と連携して8月に実施した避難訓練では、消防団の放水や緊急通報の訓練を行っている。ホームは高台にあるが、災害の状況に応じて対応するために、市指定避難場所を熟知し、市のハザードマップに福祉施設として事業所名を連ねている。飲料水や食品、紙オムツ等の備蓄がある。	昨今の自然災害状況から、入居者の持ち出し書面の検討や備蓄台帳の整備をお願いします。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
38	(17)	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者の方々には人生の先輩であるという尊厳の念を持って接している。個人情報やプライバシーの確保は職員間で情報交換を行いプライバシーに配慮した対応に心がけ、実施している。個人記録に関しては施錠できる場所に保管している。	苗字より、「〇〇先生」と呼びかけ本人に寄り添ったり、耳が遠くなっている入居者には大きな声ではなく耳元で声かけをするなど、生活歴や職歴、心身の状況に応じた対応が実践され、入居者は穏やかな生活を送っている。	
39		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	出来る限り利用者本人から希望を聞き、本人の意思決定によりサービスを実施している。また理解力に合わせての説明を行い支援している。		
40		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとりのペースを大切にして、利用者の希望に沿って好きなように過ごして頂いている。レクレーションへの参加等は無理することなく本人の希望に配慮して、柔軟な支援を行っている。		
41		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	以前から着ていた服や、使用していた化粧品・装飾品等は自宅から持参して頂き、利用者本人の好きな身だしなみやおしゃれができるように支援している。		
42	(18)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	現在、食事作りは集中厨房で行っているの、食事作りに参加していない。あとかたづけやテーブル拭きなどはしてもらっている。施設の畑で収穫した野菜は利用者に見せて、これが今日の食事のおかずになりますと言っている。	調査日、管理者がホーム畑のとれたての白菜を入居者に見せるなど、旬の食材が食卓に上がっている。今夏、豊作のスイカは食後やおやつで、畑で掘った芋は焼き芋で楽しみ、秋刀魚焼きやバーベキュー大会、クリスマス会のバイキングなどは、恒例行事となっている。調査日、柔かく調理された食事が、持ちやすい小鉢や取手つきの汁椀に盛られ、職員の見守りや声かけ、食材を細かく切るなどで、入居者は其々のペースでゆっくりと食事をしていた。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	水分確保は個人記録にその都度、量を記録し、1400cc摂取を目安とし、利用者により調整している。食事量は利用者に合わせて加減している。特に疾患のある利用者には状態に合わせて工夫している。ティタイムは紅茶・コーヒー・日本茶・牛乳等日々アイテムを替えている		
44		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、口腔ケアは行ってもらい、うがいしてもらい、入れ歯をきれいに洗えるように声かけを行ったりしている。		
45	(19)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	一人ひとりの排泄パターンの把握を行ない、排泄の失敗を少なくしている。	廊下と脱衣室から出入りできるトイレを含め4ヶ所にトイレが設置され、同じ場所のトイレ使用で、排泄の自立を促している。布パンツ使用はないが自発的にトイレに行く入居者もある。排泄リズムに応じた声かけや誘導が行われている。	
46		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	牛乳飲んで頂いたり、刻み食にしたりなど、個々に応じた予防を行っている。便秘の兆候があるときは、訪問看護と相談し、指示を受けている。		
47	(20)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々に応じた入浴の支援をしている	開設当初は、一人ひとりに合わせて入浴を行っていたが、現在は曜日・時間を決めて行っている。月・水・金が入浴日。7月・8月は日曜日以外毎日入浴。	手動式のリフトで車イス利用の3名が入浴しているが、職員の介護負担の軽減だけではなく、入居者にとっても安楽な入浴となっている。週3回の入浴日以外は足浴を励行し、血行障害や皮膚疾患が改善されたり歩行のバランスが良くなり、入居者に喜ばれている。	
48		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	昼食後のひと時などソファで休息、昼寝などしている。居室での休息を希望すれば、居室へ誘導している。夜、就寝する時はいつも着ているパジャマに着替えて、自宅と同じようにリラックスしていただけるようにしている。		
49		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬の目的や用法、用量について理解し、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている。各利用者の薬の仕分けは訪問看護のナースが毎日行っている。		
50		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	歌を歌ったり。洗濯ものをたたんで頂くなど生活歴に応じた役割や気分転換を図っている。 時にはおやつは、デッキで午後には紅茶気分。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51	(21)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	1年を通して、天気の良い日は、出来るだけ施設の外へ出て、周囲の山や花や自然と触れ合っている。春は花見。秋は外で旬の秋刀魚バーベキューで、秋の味覚を満喫している。	ホームから前方の山々が見渡せ、ウッドデッキに出るだけで、季節の移り変わりを感じることができる。初詣は恒例となり、天候の良い日にチューリップや紫陽花などの季節毎の花見に全入居者で外出をしたり、敷地内前の駐車場で満開の桜の花見をしている。先月は3名の入居者と、地元企業主催のイベントで大道芸などを楽しんでいる。	
52		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	利用者本人は全員お金を所持していません。外に出かけアイスクリーム等を食べる時も職員がお金を管理している。		
53		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	利用者本人が電話をしたいという申し出は今のところない。家族に電話して会いに来るように言っているとされた時は、すぐに連絡を取っている。		
54	(22)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	玄関には季節感のある花などを置き、居間のカウンターには季節ごとの置物を飾り、季節感を取り入れている。室温は温度計と利用者の要望で調整し、加湿空気清浄機を使って室内を居心地良く過ごせるように工夫している。室内は利用者の青春時代の歌や童謡、クラシックを流している。	門扉傍の畑は満開のコスモス、玄関に続くスロープのプランターは鮮やかにペコニアが咲き、隣接する小規模事業所との間に設けられた屋根つきのウッドデッキには、テーブルや椅子が置かれている。玄関や廊下は掃除が行き届き、共用空間はU型の食卓や椅子、机やソファ、大型テレビが設置され、入居者は其々の定位置で食事やアクティビティを楽しみ、寛いでいる。	
55		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	一人掛けのいすを対面式にならべ、全員と一緒に座られる。一人でいたいときは、黄色のソファに座られている。		
56	(23)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	利用者が以前使っていたタンスや小物・飾り物を居室に置き、少しでも居心地良く過ごせるようにしている。	入口には表札が掛けられ、暖簾がかかった居室もある。タンスや机、椅子、テレビが持ち込まれたり、壁に掛けられた木製ボードには家族写真、職員と共作の貼り絵が飾られている。どの居室も整理され、車イスや歩行器の移動が容易で、ベッドの高さを調節できるように電動ベッドが設置され、居心地よく過ごせるように支援している。	
57		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	廊下、フロアにはものは置かず利用者が移動しやすくし、トイレは廊下に3つ、フロアに1つ配置し本人が気に入ったトイレを利用している。		